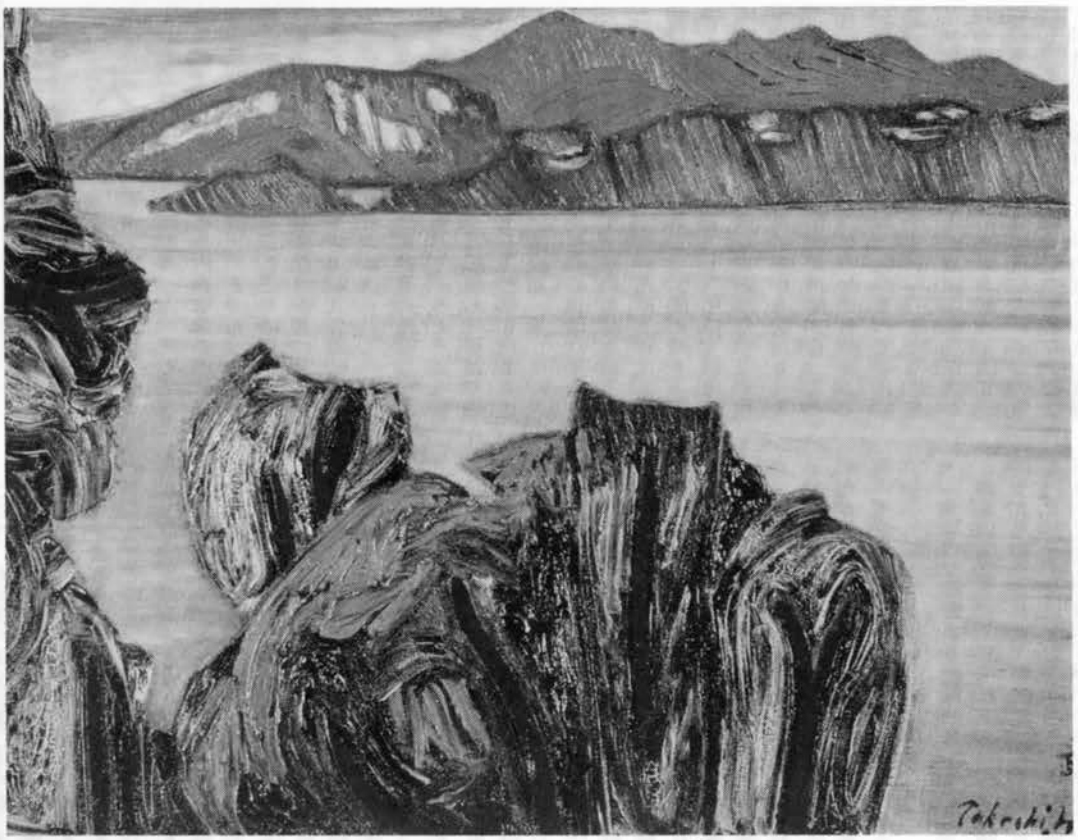
山と博物館

第35巻 第7号　1990年7月25日　大町山岳博物館

特集　巨匠が描いた国立公園50景展　7／22～8／26



十和田湖　林　武

巨匠が描いた国立公園五十景展に寄せて

石沢　清

近代日本を代表する巨匠たちが、国立公園を競うように描きあげた八十点程が存在していることは、私も知っていた。

そして、しばらく前に、その作品群を観たことがある。

よくこれだけの画家たちが揃ったものだと驚くとともに、その作品に深く感じ入ったことだった。

その作品群が、どこに、どのように保管されているのか、どういう手続きで借用できるのか―。私などに判るはずもなかった。

夏の催しとして、大町山岳博物館で美術展を取り上げるようになり、企画・運営など手伝うようになっているが、毎年館関係者に「館に最もふさわしい、国立公園景展ができないものか?」と言いつづけていた。

館関係者も、よい催しになると、精力的に探してくれた。それが、国立公園協会にあること、借用も可能であると判ってきた。

しかし、困難な借用交渉、そして費用などを乗り越えて、いよいよ実現のはこびとなったが、まことに快事である。

火つけ役の私としても、これら巨匠たちの作品にふれられると思うだけでも、心おどる思いでいっぱいである。

巨匠、林武氏（文化勲章受賞、芸術院会員）の一代の秀作と言われている「十和田湖」が仕上った時、氏は感きわまって、東京の夫人宛に「ケッサクデキタ」と打電したと言われているが、この一作を鑑るだけでも価値がある。

主な画家をあげておく。

坂本繁二郎・高田誠・林武・吉井淳二・田村一男・小山敬三・石井柏亭・和田英作・高畠達四郎・服部正一郎・足立源一郎・北川民次・中村琢二・中沢弘光・野口彌太郎・児島善三郎・有島生馬・猪熊弦一郎・田崎廣助・小林和作　他。

（日展会友、大町山岳博物館嘱託員）

国立公園絵画に現われた自然風景

大井道夫

(一)

大町山岳博物館で国立公園絵画展を開催するという。その趣意書には次のように書かれていた。（芸術家の目を通して見た山岳を中心とした国立公園のすばらしさを紹介し、国立公園の持つ自然の美しさを改めて見直す場とすると共に、国立公園を永遠に保存する意義再考の場としたい）。その言やまことに善しである。しかも、わが国唯一の権威ある山岳博物館は、国立公園絵画を飾るに相応しい絶好の会場である。絵画を保管する国立公園協会としても大賛成、喜んで共催させて頂くことにした。

そこで、本紙を借りて国立公園絵画とはいかなるものか、それがどのような経緯を辿って現在に至ったか、そのあらましを述べるとともに、今回出展される山岳風景画五十点のうち、幾つかを選んでその生の自然風景を紹介し、絵画鑑賞の少しでも参考にして頂けたならと思う次第である。

(二)

わが国の国立公園の指定は昭和九年に始まった。それよりまえ、昭和六年には「国立公園法」が制定されたが、さらにその先、四年には、この行政を民間ベースで促進させるべく国立公園協会が設立された。そして、当時はすでに国立公園候補地はほとんど出揃っていた。わが国を代表する国立公園の自然風景を絵画にして保存しようというアイデアが生まれたのはこのような時期だった。そして、このアイデアを出したのは内務官僚の湯沢三千男氏（のちの内務大臣）であった。実際の絵の制作がいつから始められたかは正確には判らないが、昭和五年ではないかといわれている。そして、十二年当時、国立公園絵画はすでに三十二点を数えていた。

国立公園行政は最初は内務省の所管だったが、昭和十三年、厚生省ができるとそこへ移ったが、やがて折角できた絵画も、落雷や戦災によって幾点かを焼失して終戦を迎えることとなった。

戦後における国立公園行政の復活は早かった。昭和二十一年、まず、伊勢志摩が指定され、続いて支笏洞爺、上信越高原、秩父多摩、磐梯朝日というように新しい公園が続々と誕生していった。そして、二十六年は「国立公園法」制定二十周年に当っていたので、それを記念して国立公園絵画の制作を復活させようという声が起こり、制作が再開され、二十八年には全部で五十点になった。その後は、公園指定に合わせて順調に制作されて今日に至った。国立公園は現在二十八、最後の公園は釧路湿原だったが、この公園の風景が画かれたのが六十三年、この一点を加えて国立公園絵画は全部で七十九点に達している。いずれも、その時代、時代の一流の画家の手になるものばかりである。

(三)

ここで、わが国の国立公園二十八を、それを構成する自然風景によって四つに分けてみよう。まず、山岳景を主体とする公園である。それは十二ある。次が海岸景を中心とするものであり、それは、七つある。それから、山岳景と海岸景の両方を合わせ持つ公園であり、これは八つある。最後が平原景からなる公園であり、これは釧路湿原一つである。そこで山岳景を持つ公園となれば、山岳景を主体とするもの十二と、両方合わせもつ八つを加えて二十ということになる。わが国土の七割近くが山地であるので、やはり、山岳国立公園が多いという結果になっている。

ところで、今回の五十景の大部分はもちろん、いま述べた二十公園の山岳風景から選ばれたのであるが、それ以外にも平原景の釧路湿原（湿原の夕映え）、海岸景の山陰海岸（鎧の袖）、瀬戸内海（琴平宮）も選ばれている。

さて、これら五十景のうち、幾つかを取り上げて、その風景について若干の解説を試みてみよう。ここでお断わりしておかなければならないが、私は絵画についてはずぶの素人であり、それを芸術として論じる知識も技術も、残念ながら持ち合わせていない。したがって、芸術としての評価ではなく、一流の画家たちの目が捉えた風景を借りて、それを現実の風景に置き換えて論じることにしよう。

(四)

「サロベツ原野より利尻礼文」　中根　寛

最北の国立公園、利尻礼文サロベツは昭和四十九年指定された。利尻島、礼文島（れぶんとう）、それに北海道本島のサロベツ原野一帯を区域に包含している。この絵は、サロベツ原野から海を隔てて利尻岳（一、七一九m）を望む風景であり、画面の右端にかすかに姿を見せているのが礼文島である。利尻岳は円錐状の成層火山であるが、山頂部は開析が進

愛別岳・比布岳　足立 源一郎

尾瀬沼　中村 善策

んでおり突兀とした独特な山容を示すが、絵は雲に隠れてその部分は見えない。

浅間山　小山　敬三

三保富士　和田　英作

「湿原の夕映え」　松樹　路人

釧路湿原は昭和六十二年指定された一番新しい国立公園である。釧路市の北側に広がる湿原であり、寒冷な泥炭地であり、米も野菜も育たない荒れ地としてかつては見捨てられていた。しかし、わが国の湿原の総面積の約六割を占め、そこはまた、タンチョウをはじめとし、キタサンショウウオ、イトウなどの珍しい野生動物が生息するラムサール条約の指定地域でもあり、価値ある不毛の地として国立公園となった。

この湿原を眺める視点は多いが、東側の丘陵地の縁に立つのが一番よい。この絵の図柄もその視点に立ち、釧路湿原の大半を眼下に収め、遠く雄阿寒岳（右端、一、三七一m）、白煙をあげる雌阿寒岳（一、四九九m）を望む雄大な風景である。

「愛別岳、比布岳」　足立源一郎

北海道の屋根、大雪山国立公園は面積二三万ヘクタール、わが国最大の国立公園であり、指定は昭和九年に遡る。愛別岳（二、一一二m）も比布岳（ぴっぷだけ、二、一九七m）もともに大雪火山群に属する山岳である。この図柄は愛山渓温泉付近の高台からエゾマツの林の上に聳える二つの岩峰を捉えた風景であり、そこは大雪山塊を仰瞰する視点として優れた場所である。

「十和田湖」　林　武

十和田湖はわが国屈指のカルデラ湖である。少なくとも三度の大噴火と二度の陥没によってできたといわれている。その成因をもっとも的確に捉える風景は発荷峠付近に視点を置き、十和田山（一、〇五四m）方向を眺めるものである。この絵はまさにその視点からその方向を望んだものであり、手前の二つの半島は二度目の陥没をあらわし、その向こうのスカイラインは最初の陥没をあらわしている。画家の鋭い目は十和田湖の成因を見事に解き明かしてくれている。

十和田国立公園の指定は昭和十一年であるが、現在は八幡平地域も含み、名称も十和田八幡平に変っている。

「月山」　木下　義謙

磐梯朝日国立公園も山また山の山岳公園であり、指定は昭和二十三年に遡る。その一番北の山が月山（一、九八〇m）であり、羽黒山、湯殿山とともに出羽三山として古くから著名である。絵は山形市の近くを流れる寒河江川（さがえがわ）の河畔から眺めたものである。この山はかつては円錐型の成層火山であったが、その後の爆発で大崩壊したために、ちょうど牛が寝たような平低な山容を表わしている。「黎牛山（くろうしやま）」の別称があるゆえんである。

「尾瀬沼」　中村　善策

日光国立公園は昭和九年指定された。当時の区域は魅力溢れる自然を持つ日光地域と尾瀬地域から成っていたが、なかんずく、後者は自然を愛する人たちに自然保護の原点として大事にされてきた。

絵は尾瀬沼湖畔に立ち、桧の突出しから三平峠方面を望む風景である。しかし、現在の沼は様変りし、一時は外来種、コカナダモが繁茂して騒がれた。尾瀬一帯は昔のまま、自然保護の聖域として残さなければならないところである。

「浅間山」　小山　敬三

JR信越線の車窓風景の圧巻は、軽井沢から小諸までの浅間山（二、五四二m）の悠揚せまらぬ山容である。この山は昭和二十四年指定された上信越高原国立公園の最高峰であり、三重式活火山として現在も盛んに白煙をあげている。図柄は軽井沢方面からカラマツ林を越して捉えたものである。

「三保富士」　和田　英作

富士山（三、七七六m）を眺める視点は多い。東の伊豆半島から眺めるのもよいし、北の三ツ峠からもよい。また、西側の天子ヶ岳、あるいは南アルプスの峰々から望むのもよい。だが、三保松原から駿河湾を隔ててみる風景は、羽衣の伝説を思い出さないではおれない日本的風景であり、日本人の原風景といってよい。しかし、現在、この絵に画かれたマツ林の風情はもはやない。淋しい限りである。

富士箱根国立公園は昭和十一年指定されたが、現在は伊豆半島、伊豆七島をも含み、名称も富士箱根伊豆となっている。

「秋の白馬岳」　山本　鼎

秋は山々がよく見える。図柄は糸魚川街道

秋の白馬岳　山本　鼎

の森上（もりうえ）付近から、黄金色に輝く田圃と農家を前景として白馬岳（二、九三三m）を眺めたものである。中天に月がほのかに浮ぶのびやかな風景であり、これもまた永遠なれと願わないではおれない日本の原風景である。

上高地大正池　中沢　弘光

暁明の根子岳　坂本　繁二郎

「上高地大正池」　中沢　弘光

中部山岳は、いわゆる北アルプス全域を含む本格的な山岳国立公園であり、その指定は昭和九年に遡る。前述の白馬岳も、また、この上高地一帯も、この公園のハイライトといってよい。特に大正池から穂高連峯を望むこの図柄は、わが国の山岳風景の極めつきといってよく、多くの人々に親しまれてきた。だが、池は既に土砂の流入埋没によって現在は見るかげもなく、また、水中の立木はもはや見当らない。絵の制作は昭和七年だったので六十年近い年月は風景を大きく変貌させたのである。

「大山」　香田　勝太

大山（一、七一一m）は中国地方きっての名山である。成層火山であるが、山頂部がかなり開析されているので、見る場所によってはまったく違った姿を現わす。北西側からは開析された北壁が正面に見え、小型のアルプスのように見えるが、南東方面からは、伯耆富士の名のとおり富士山型の姿を見せてくれる。絵はその南東側からの風景である。

大山国立公園は昭和十一年指定されたが、現在は蒜山（ひるぜん）、隠岐、島根半島、三瓶山（さんべさん）なども含み、名称も大山隠岐に変っている。

「暁明の根子岳」　坂本繁二郎

阿蘇国立公園も古い公園である。指定は昭和九年だったが、名称は現在、阿蘇くじゅうに変更されている。

この絵は南郷谷の外輪山の山腹から根子岳（一、四〇八m）を望んだものであり、ここは大観望とともに阿蘇の山々を眺める代表的な視点といってよい。そして、この視点に立つには、やはりこの絵のように明け方がよい。根子岳は中岳、高岳、杵島岳、烏帽子岳とともに阿蘇五岳の一つであり、以前はそれらと同じカルデラ内の中央火口丘といわれてきたが、最近の学説では、それ以前の古い火山体であると見られている。

（五）

風景とはまことに移ろい易いものである。ここに挙げた自然風景十二景のなかには、絵画に画かれた風景をすでに跡かたもなく失っているものさえある。残念なことである。しかも、最近はリゾートばやりである。また、公共事業の画期的な拡大も図られようとしている。これらの大波が国立公園の奥座敷にも容赦なく押し寄せてくるのではないかと心配である。

国立公園の奥座敷を飾る自然風景の一つ一つは、私たちの精神形成にはかりしれない影響を与えてきた。それゆえ、その一つ一つはまた、日本人すべての心の拠りどころとしての原風景といってよいだろう。この国立公園絵画展が、その自然風景を守り育てる一助としてささやかでもよい、機能することができたなら、主催者の一員としてこれに過ぎた喜びはない。

（財団法人国立公園協会理事長）

※『巨匠が描いた国立公園50景展』

主催　国立公園協会・大町山岳博物館
後援　環境庁
場所　山岳博物館特別展示室・ホール等
常設展とも平常料金でご覧いただけます。

博物館だより

～岳と緑のなかの'90夏・信濃セミナー～

地方文化と中央文化の交流を目的に、山岳博物館では初のこころみとして、左記により4日間にわたるセミナーを開催します。

主催　信濃セミナー実行委員会
　　大町山岳博物館　新日本文学会
協力　八坂村　しあるの会
期間　8月3日(金)～6日(月)
会場　大町山岳博物館講堂
入場　どなたでも聴講いただけます。

第1日　3日(金)　講演　2時～5時
『文学に何ができるか』
針生一郎（新日本文学会議長）

第2日　4日(土)　シンポジウム　9時～1時
『過疎と過密・自然と人間』
パネラー他（予定）薄井清（農民作家）谷口現吉（日本山岳会名誉会員・大町）安藤周治（過疎を逆手にとる会・広島）荒沢進（山岳博物郷友の会・大町）松山毅（八坂村前教育長）合津今朝吉（大町）

第3日　5日(日)　文芸講演　9時～11時半
『私の創作体験』
長谷川龍生（詩人）野呂重雄（作家）

第4日　6日(月)　文芸講演　9時半～
『信州が生んだ歌人たち』
久保田正文（文芸評論家）

※ほかに八坂村明日香荘での多くの講話等を交えた懇親会等あり。詳細は山博へ照会。

山と博物館第35巻第7号
一九九〇年七月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二三〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）